

『万の文反古』『代筆は浮世の闇』と『楽出家』

梁 誠允

一

本稿は、西鶴奇譚中の「秀作」とされる『万の文反古』(元禄九年(一六九六)刊)卷三之三「代筆は浮世の闇」を取り上げ、その「因果」のあり方と人物造型とが、従来の因果譚・懺悔譚と比べてどのような独自性を持つかを考察する。同時に本話の書簡体の効果は乏しいとする過去の評価^{〔1〕}に対し、一人称の告白体が十分有効に機能していることを指摘し、西鶴の当代の世相に対する風刺や、人性批評を具體的に見てゆくことにする。

僧侶の手紙として設定されている「代筆は浮世の闇」の梗概を次に示す。

越前府中で僧侶になっている弟に対し、今は自分も

盲目の物乞いの僧である自心が、出家後、惨めに生きている経緯を伝える、代筆による手紙である。大名の買物使いの侍がゆだんしてこの男(在俗時の自心)の店に財布を忘れていった。男はそれを欲心から隠し、盗んだ。侍は公金だから返してくれと哀願するが、男は無情にも拒否し、ついに武士の面目を失った侍は、一羽の生きた烏の両目を脇差しで抉り出して男に投げつけ、呪いをかけてから切腹する。のち男は出家したが、盗賊によって全財産を失い、自殺を図るものの、何度試みても侍の亡霊があらわれてその邪魔をし、侍の予言通りに烏に両眼をつぶされ盲目となる。以上のような因果の次第を弟に告白し、男は、自分の死後、一遍の念仏を手向けてくれるように頼んだ。

悪行を後悔して出家する本話に対し、『万の文反古』の中で、同じく僧の書簡である卷三之一「京都のはな嫌ひ」と卷五之四「桜の吉野山難義の冬」は、前者は「美童は我等の持病」と、相変わず男色に溺れており、後者も、吉野山の冬の難義は堪忍できても、男色相手がいないのは我慢できないので、その相手を留意してほしいというなど、共に出家の放埒ぶりが誇張されている。一方、この「代筆は浮世の闇」では、自心はこの手紙で在俗時に弟を都から追い出し、道心を起こさせた過去の不祥事について謝り、併せて出家前の悪行とその因果に責め苛まれていることを告白する。全体に後悔と自責の情調がみなぎっており、一話は懺悔話と言つてよい。しかし留意すべきは、懺悔物語としては異例であるが、主人公は出家し懺悔しても因果から脱することができず、最後まで苦悩に取りつかれた人物となつている点である。この自心について、暉峻康隆は、この侍の亡霊が「一刻でも生きながらへさせよう」とする特異性に注目して、自心は「懺悔によつても救はれない罪悪感」の持ち主であり、自殺ができないのは「遁れるすべのない罪悪感」と「本能的生存欲」との悲惨な葛藤のためだと解釈する²。一方、谷脇理史は本話を「小さな男の自責の念をイメージ化」して「ふとした偶然から小さな悪事に走

り、その結果が重大なものとなつて自責の念に苦しむといった浮世によくありそうな人の心のありようを、十分な想像力を駆使して面白い奇談に仕立てあげるところが西鶴らしい³とし、自責の念に苛まれ、死のうとしても「死への恐怖のために、死に切れない気弱な男の苦しみを告白したものと」言つている。そして亡霊は、自心の自責の念が生んだ種々の「幻覚・幻影」とする。このように両者共通して、自心を「自責の念」と「罪悪感」に苦しんで死のうとするが、一方で、死を恐れる、人間の根源的生存欲をもつ人物として把握する。従来の説解はここで終わる。特異な幽霊譚であるためか、奇談への興味が中心となつており、書簡体はあくまで「外型として用いられているだけで、方法として作品と内容的にかかわることが出来ないし、又その必要もない⁴」と評されるなど、どういう奇談が語られているかということに関心があつても、自心の行状がどのようになつていくかについては、具体的に問題とされてこなかった。本稿では、そこを問題としたい。

自心は手紙の処々に「我身の因果れきせん、さりとはおそろしく候」、「せまじき悪心、今なげきても帰らず」等と記し、人に会うごとに懺悔していると言うところから、自責と後悔の念があることは確かである。だが、この後悔

と自責の念は、手紙が書かれた時点のそれであつて、自心が最初から罪責感を持つていたかどうかはわからない。回想として語られる過去の自心について、細部の文脈に注意すると、彼は出家後、盗賊によつて一生のたくわえを失つたが故に、

やうく鉦をたゝき申、袖に握米をあつめて、命をつなぎ申候。是は世に住甲斐もなく、兎角、身を果して、後の世をたすからんとおもひ定め、

すぐさま広沢の池で入水往生を図つたわけで、自責の念と罪悪感に駆られて自殺を断行したのではない。むしろ、侍の怨霊の登場を促す自心の入水自殺の試みに対し、亡霊が「悪しや、おのれ、此世をのがれたき所存、をもひもよらず」と非難することで、自心の往生願望には現実逃避のイメージが与えられている。そして何度も自殺を試みている所に死への強い執着は見えても、死への恐怖心を読み取ることができない。

手紙の前半部の自心について、詳しく見てゆきたい。自心が俗世にあつた時に犯した悪行と同種の悪行が描かれている『西鶴織留』（元禄七年（一六九四）刊）巻一之二「品玉とる種の松茸」と自心の場合を比較してみる。『西鶴織留』の方は、金払いの悪い問屋の亭主が、大節季で掛け取りに

きた手代に金を支払つたが、その銀子を袋に入れずに帰り、亭主は取り隠してしまう。のちに談判されても、亭主は確かに渡したといい、それゆえ手代は自害するが、その因果が報いこの問屋が断絶したことを記した上で、最後に「無理なる欲はかならずせまじきことぞかし」と締め括られている。因果応報の末路においては、「代筆は浮世の闇」では怨霊譚が用いられて『西鶴織留』と異なるが、「代筆は浮世の闇」の自心も、やはり「無理なる欲」から悪行を犯したのであつた。そして次のように、自心の悪行の動機、すなわち、住居の新築をしたいという欲望が具体的に表現されていることがわかる。

むかしの住宅三条に、酒商売の外に紙見せ出し候に、次第に仕合よく渡世もゆるりとおくり、万願ひのま、成折ふし、こゝろが、りは、軒下のひくき居宅、元和年中の普請なれば、ひとつとして気にいらず、近年のうちは何ぞ銀もうけいたさば、思ひのま、に立なをし、衣食住の三つに、楽しみ極めんとぞんじ候所へ、大名の買物使らしき侍ひの、挟箱持一人めしつれ、中奉書入よしにて、三百枚売わたし、代銀請取、人帰らさまに、ひとつふたつ狂言しばるの物がたり仕り申候が、さいふを取残してゆかれし。跡にて引提て見れ

ば、しつとりと重おもより、我あさましき欲心おこりて、彼袋をふかく隠かくしてさらぬていに罷有候処へ、

また、次のように、

「是はわたくしの金銀にあらず、主命なれば、此そこつ武士の一分ぶん立がたし。是非に給はれ。此恩はわすれじ」と、ふたこしさす人の町人に手をさげて、さまざま、詫られしに、心つよく隠しすまし、かへつていひかけのやうに申なし候へば、

と、金を置き忘れた侍が哀願しても絶対に金を返そうとはしない、自心の金に対する執着がくつきりと形象化されている。このような強烈な欲心を抱えたまま、出家入道する設定となつているところを改めて確認しておく。

二

この一話の特異な点は、自心が自殺しようとする侍の亡霊がそれを邪魔することである。「我命の我ま、に死れざるあんぐわ、聞伝へたるためしもな」と自心は嘆息するが、超越的存在が相手に死ぬ権利がないことを告げて自殺を引き止める話ならば、『三国物語』（寛文七年（一六六七）刊）等に類例がなくはない。しかし「代筆は浮世の闇」の特徴をより具体的に、

①主人公の死への願望が強く、何度も自殺を試みることに、
②その都度、超常的存在が登場して命を救おうとすること、
③それによつて、かえつて主人公の苦痛が持続すること、
という三点に要約するならば、その三つの要素を持った、より近い話として『沙石集』巻第二之四「依ヨリ二薬師カウシヤク観音カンオンノ利益イノチマツタキ」命イノチ「全事」がある。『沙石集』の話は、承久の乱の合戦で深刻な傷を負った主人公右馬允明長が薬師如来の化身である若い僧によつて救われるという内容で、右馬允明長の後裔（僧）が語つた証拠正しき話とされる。『沙石集』と「代筆は浮世の闇」の本文を比較してみる。傍線部は両者の文言が似ている箇所である。

一度ニシヌベカリツル身ノ耻ハヂサラセン事、口惜ウラシクク
覚オボテ、河ニ身ヲナゲントテ、河ノハタヘアユミヨル時、
若キ僧一人、竜山寺ヨリ来レリ。「死ヌマジキゾ、
自害ナセソ」ト仰ラレケリ。夢カト思ヘバウツ、ナリ。
サレドモ、キズモイタク日モアツシ。タヘガタク覚ヘ
ケルマ、ニ、猶ナオ、身ナゲントテ、アユミヨルニ、又此
僧、繩ヒモヲヒカヘテ、「死ヌマジキゾ、アルベカラズ」ト
制シ給ケレバ、思トママリヌ。熱田ノ宮ノ講衆神官ナ
ント皆知テ、「申アツカルベシ。社頭ニ講行ナンドツト
メテ、奉公ノ仁ニテ候。シカ／＼ト申者也」ト申ケレ

バ、「名人也ケリ」トテユルサズシテ、鎌倉へ具シテ参
テ、義時ノ見参ニ入ル。「トクく、首ヲハヌベシ」トテ、
湯井ノ浜へツカハス。又例ノ僧出来テ、「ナ歎ソ、死
ヌマジキゾ」トノ給ヘドモ、今ハ最後ト思テ、一心ニ
念仏シケリ。サテ乱橋トイフ橋ノ本ニ、年来ノ知音
ユキアヒテ、「アレハイカニ」トテ馬ヲヒカヘテ物語ス
ル。「弋瀬河ニテ死ベカリシ身ノ、セメテモ耻ヲサラ
サントテ、カ、ルヤウニテ、只今コソ、首ヲハネラレ
ントテ、浜へマカリ候へ。最後ノ見参コソウレシキ」
トテ、涙ヲナガス。

(卷第二之四「依ニ薬師観音ノ利益ニ」命全事)

有夜、広沢の池に行て、西のかたの岸に立て、水底
のふかき所、最後ためと見あはせ申候時、いつぞやの
侍ひあらはれ、出松かげより我に取付、「悪しやおのれ
此世をのがれたき所存をもひもよらず。此一念のかよ
ふうちは眼前に恥をさらせん」と、胸くるしき程しめ
つけられ、又草庵に立帰り、只ほうぜんと夢のごとく、
それより三日すぎて曙に、舌喰きつて死んと起あがれ
ば、彼さむらい、まほろしに見えて、我がかしらをき
びしくおさへ、いくたびにても「汝に自害はさせじ。
我執心の鬼となつて、迎ひにきたる火の車を待て」と

いふ声、身にこたへ、骨もくだくるばかり悲しく、

(代筆は浮世の闇)

『沙石集』のこの話において、薬師如来によつて何度も
自殺をとどめられることは、主人公の右馬允明長にとつて
は、肉体的苦痛が持続し、生き恥をさらされることを甘受
せねばならないことになり、むしろ苦しみであるという発
想と、傍線を付した措辞を見れば、この話と「代筆は浮世
の闇」とは強い類縁性がある。特に注意すべきは、二人と
も一度で自殺を断念しないことで、自ら死ぬことができな
いことに自覚のない点も共通する。

薬師如来の化身は、最終的に仏道成就の方便として主人
公の自殺を妨げ、命を全うさせようとする。一方、自心の
場合は、侍の亡霊は、かつて烏の両目を抉つて自心に投げ
かけた呪いを成就させるために、自心を生き長らえさせよ
うとする。要するに『沙石集』の方は、やや異色ながら、
右馬允明長が仏道に導かれるという現世利益譚となつてお
り、「代筆は浮世の闇」は死を切望する自心の心と自殺を阻
止する侍の執念とが合わさつて特異な因果応報の物語とな
っている。つまり、『沙石集』の主人公がまことの信心によ
つて最終的には薬師如来によつて救済されているのに対
し、自心の場合はそうなつてはいない。

そもそも自心が自殺を思い立ったのは、盗賊に財産を奪われて乞食坊主になり、これでは世に「住甲斐」がないと、すぐに極楽往生を願ったからであった。自心は入水・断食等の方法で何度も自殺を試みるが、これらは、従来「異相往生」と呼ばれる類のものであり、特に四天王寺信仰から始まった入水往生については、往生の絶対要件として臨終の際の正念が必須である。入水往生は心身が健全な状態にあつて、臨終正念を得た時に、思い立たれるべきものであり、もしも臨終の際に心に乱れが生じたらば、その死は無意味となつてしまう。臨終正念の問題は『発心集』『宇治拾遺物語』『沙石集』等の入水往生譚で取り上げられており、西鶴もまた関心を抱いていた。『諸艶大鑑』（貞享元年（一六八四）刊）卷八之五「大往生は女色の臺」の世伝の焼身大往生の場面や、『好色一代女』（貞享三年（一六八六）刊）の次のような場面である。

此時、身の一大事を覚へて、誠なるかな、名は留まつて兒なし。骨は灰となる草沢辺、鳴滝の麓に来て、菩提の山に入道のほだしもなければ、煩惱の海をわたる艦綱をとき捨て、彼岸に願ひ、是なる池（広沢の池）

論者注）に入水せんと、一筋にかけ出るを、むかしのよしみある人引留て、かくまた笹葺をしつらひ、死は時節にまかせ、今迄の虚偽、本心にかへつて、仏の道に入とす、め、殊勝におもひ込、外なく念仏三昧に明暮、

（卷六之四「菩提の五百羅漢」）とあつて、この部分は『沙石集』卷第四之五「妻臨終之障成事」の「マメヤカニ生死ヲハナレント思ハシ人ハ、菩提ノ山ニ入ル、ミチノホダシヲステ、煩惱ノ海ヲワタル、船ノトモツナヲトクベシ」が踏まえられ、ここで「一大事」とは生死を離れる頓悟を指している。中嶋隆はこの箇所について、一代女の解脱は、老衰による〈性〉の欠如を自覚し、〈性〉と〈生〉とを放棄したことによつて得られたと強調するように、入水往生は遂げられなくとも、正念を得ていた一代女は救済されたのである。

ところが、自心の場合には、出家の際に自分の悪心を改めようと決意し、仏の道に深く分け入ったと自ら言明しているにもかかわらず、正念を得ないまま、死ぬことに執着するばかりであり、俗世で蓄えた財産で「けいきよき所に庵をかまへ」、安楽な生活ができなくなると、自ら命を断とうとする。問題となるのは、死への強い執着と「是は世に住甲斐」がないという言葉である。衣食住に対する欲心を

払いのける頭陀行はそもそも考慮の外におかれており、これでは本当に悪心を悔い改めようとしているのかどうか疑わしくなってしまう。むしろ景色の良い所に庵を構え、安楽な生活を望み、それが挫折すると直ちに住む甲斐がないと思ひ込み、往生を願う自心の姿は、当時の仮名啓蒙書・仏書等で非難されていた「二世安楽」に該当する。例えば『清水物語』（寛永一五年（一六三八）刊）「下向」^⑩には、

仏だに信仰すれば、現世安穩とて万災難を逃れ、

此世にては無比の楽に誇り、仏より御宛行ありて仕合
よく家も榮へ、来世にては七宝莊嚴の巻柱のもとに
行くなり。是を二世安楽と申なり。たとひ今まで罪作
りたる人にては、題目を唱へ、又は念仏を申せば、罪
も滅して善人たり。此世の道を行はずとも、何事も仏
の方便にまかせ、正直なるこそよけれ。

と説く上人（僧）をやり込めながら、「二世安楽」を願う者を明確に批判している。同様の批判は『祇園物語』（寛永末年刊）や『身の鏡』（万治二年（一六五九）刊）にも見え、真心のないまま仏の利益ばかりこいねがう浅はかさ、すなわち世を楽に暮らすために仏を信仰したり、出家したりすることをきびしく非難している。さらに『為愚痴物語』（寛文二年（一六六二）刊）^⑬では、遁世者の断ち難い欲を次のよ

うに批評している。

今時せけんにも多き、とんせい道心者など、云ものを
見るに、まことのよすて人にはあらず。たゞみな、世
にすてられて、せんかたなきまゝ、名利の世をわたら
んためなれば、かみに、しゆせうぶりの、むよくがほ
なりといへども、ないしんに、うき世ののぞみ多し。
かるがゆへに、よくしんに、はなれず。そのゆへは、
かたちにかげのそふごとくに、のぞみには、かならず、
よくしん、そふものなり。

（卷之七第一四「さかもと浄念坊の事」）

このような同時代の風潮に対し、西鶴も信仰に真心のない者を、一貫して批判している。例えば『本朝二十不孝』（貞享三年（一六八六）刊）卷一之四「慰改て咄しの点取」で「今の出家形気程、おかしきはなし」として、「世を楽に墨染になれと、親類了簡の上にて髪をおろさせ（中略）又の世の仏の道をも心の駒の七次第にしらず」と評し、「殊更、近年女の墨染も仏の身ならば、彼らが心底を聞たし。後の世願ふは稀なるべし」と、まことの信心のない安易な出家の浅薄さを描いている。そして『西鶴織留』（元禄七年（一六九四）刊）卷五之二「只は見せぬ仏の箱」では、「近年、世間に後世を願ふ貞つすれど、まことの信心まれなり」や

「今時の人心ひとつも仏の道に叶ふ事にはあらず」という批判とともに、

殊更、此程の道心のむすびし新庵、氣を付て見るに、皆おかし。東高津に毎日、薄おしろいをする出家あり。塩町に常住、ひりんずの内衣うちぎして居る尼有。長町に魚釣針うをつりばりして売る坊守ぼうずあり。道頓堀にしのびがへしうつたる草庵あり。玉造りに年中、仲人なかくをして身過みまする法師有。天王寺に鉢坊主はちぼうずに衣の日借ひがしをとせいにする出家あり。又藤の棚近くに、十日切じゅうにちきりの借銀かひねして、明暮、十露盤じゆばんに心をつくす坊主も有。あたまを刺、墨衣着て、形は出家になれども、中々内心は皆鬼おににころもなり。鉦たゝきて念仏申て、そればかりにてすむ世の中にはあらず。

と、性欲・金錢欲を満たし、形だけの仏道帰依に終始する当世の墮落した出家の姿を列挙している。

西鶴は「西鶴独吟百韻自註絵巻」(元禄五年(一六九二)成立)でも、同様の道心堅固ではない出家者への批判的見解を、出家人道の心情にさらに立ち入り、俳諧と自注を通して形象化している。例えば、前句「弥生の鰻をにくや又売」に「山藤の覚束なきは楽出家」と付けて、次のような自注を加えている。

大かたは、世に捨てられ道心の山居、さのみ何をか
ありがたき事とも覚えず、せんかたなくて、松のちり
葉に煙を立て暮しぬ。又世を捨て思ひ入る山、一たび
殊勝なれども、勝手不自由にあらぬより、むかしの生
肴なまけに心移して俗にかへる人数をしらず。前句の弥生に
よせて山藤と出す事、法師、心覚束なきといはんため
の句作り也。

また打越の「松に入日をおしむ碁の負」にも「出家の身として、当座慰の碁のまけなどに心を残すは、我身の一大事、仏の道は外になるべし。是ぞ覚束なき所、はなれがたし」と記すなど、当代のいわゆる「楽出家」や現世利益のための信仰を軽薄と見る西鶴の視線は厳しく、同時代の仏教信仰への批判的言説と軌を一にしていると言つてよい。自心もまた、自ら意識していたかどうかは別として、心得違いの「楽出家」の一人であった。つまり、本話の後半部では、『三人法師』『七人比丘尼』『二人比丘尼』等のような、悲しみや煩惱から脱するために出家し、草庵に入る動機と罪とを告白するといった近世初期の典型的な発心遁世譚の主人公達とは異なる、当代の新しい題材としての「楽出家」像を自心に託して提示した。同じ懺悔物の様式を持つように見えても、「代筆は浮世の闇」が異なる理由はここにある。

四

西鶴以前の懺悔物の結末は、主人公達が苦しみと迷いから解放されるといのが定型となっている。しかし自心は身の因果を悟っても苦しみは終らず、かえって「しんいをもやし、生いよながらのめいど」、「がきどうのくげん」が与えられている。因果と苦患の関係を考えるにあたっては、片仮名本『因果物語』(寛文元年(一六六二)刊)下の二十一「慳貪者、生ナガラ餓鬼之報ヲ受事 付、種々ノ苦ヲ受事」に含まれている六つの話の内、二つの話が参考となる。一つは、俗世の時に「慳貪無道心」なる者が、強欲のまま法体したことにより、大入道に苦しめられ、荒くれ男に縛られて責めを受け、ついには責め殺される話であり、二つ目は、「勝レテ慳貪ノ者」が出家するために剃髪をしようしても不思議にも髪が切れず、無理矢理に鋏で切つて入道すると、火の病を受け、自殺することになる話である。つまり、この二つの話は、在世の時の貪欲を改めないで仏道帰依する虚偽への戒めが、因果譚として語られており、強欲のまま出家しても因果から遁れられるわけではないとする。また自心と同様に強欲で人の金を奪った町人木島加伯こじまかほが、蓄えた財産で安楽に過ごそうとして、夜な夜な亡霊によって

苦しめられる話が、『本朝故事因縁集』(元禄二年(一六八九)刊)に見られる。

一生遊楽二年ヲ送ラント、珍肴名酒ヲ求食セントスレバ、夜々数百ノ鬼神来テ、夫婦ノ喉ヲ掴ム。「是レハ如何」ト侘ケルニ、鬼ドモ口々ニ、「吾ヲ剥取タル金銀ヲ可レ返、人ヲ苦メ、汝榮華セバ、抓殺ベシ」ト云。加伯「酒食遊楽ヲ止メン」ト侘ケレバ、鬼神退散ス。其後、花下、月影ニ興ヲ催バ、又鬼来テ責。

(卷之二の五十四「長門ノ国木島加伯利欲因果」)とあり、この奇異は「無理ノ欲」を止めなかつた為に起こつたと説かれるが、侍の金を盗みとつた自心が、出家後に盗賊によつて全財産を奪われたように、本話も、人の金を奪えば必ず自分も財産を無くすということが、商人の知るべき道理であると戒められている。結局、木島加伯は安楽と利とを貪ることをやめ、真に懺悔して出家することによつて、鬼神も来なくなり、苦痛から解放された。

以上の因果応報譚では、強欲の心を改めずに出家した人物は悪果を被り、また真心から仏道に帰依したものは救われており、単純に出家をし懺悔するだけでは、苦しみから解放されない。自心は「我身の因果れきせん、さりとてはおそろしく候」といいながらも、「筋なき人の銀をかくし、

人の命を取申候事、今後悔身に覚申候」と過去の行動をとばの上で後悔するばかりで、「楽出家」を願う心があちこちから透けて見え、安楽な出家生活の挫折が入水往生を思い立たせるきっかけとなっているにすぎないことがわかる。そして安易な往生を図っても、亡霊の執念によってそれをこぼまれる。通常の仏教説話では、強欲のまま出家したものは、死を迎えて終わるのに対し、自心の終わることのない苦しみは、「楽出家」した自心が、罪を犯した出家前の自心と何ら変わらないことを示し、従来の仏教因果譚に比べてより徹底した戒めとなっている。

五

出家後も世に住む甲斐がないなどと言って、死への執着が、今も続く苦悩の原因であることを悟らない自心は、「我身の因果」を口にし、因果を知ったと思いついでいるにもかかわらず、実際にはそれを十分理解できていない。つまり、「楽出家」を庶幾し、因果の理を誤解した自心の苦悩は、おのずから「楽出家」の虚偽性を暴露することになっている。ここでは、ともすれば一方的な思い込みが記されがちな一人称告白体が、有効に機能していることを見逃してはならないだろう。自心の闇は自らの心の奥を悟ることがで

きず、自覚していない欲の為に、しらずしらず自らをあざむいているという迷妄であり、そのためひどく苦しむ自心の姿を描写することによって、西鶴は、当代の軽薄な「楽出家」を激しく批判し、真の出家、真の懺悔とは何かということをきびしく問うているのである。この点が従来の仏教説話に見られる因果譚とは決定的に違うところであり、断罪の苛烈さもさらにましているといつてよい。

早くから『万の文反古』が他の西鶴の作品に比べても「より切迫した主体的スタイルにしたがった作品」として高い評価を得たのは、書簡体という形式が、書き手の心情を直接的に表出したり、逆に、偽りの書簡を書くことによって、書簡の受取り手だけには書き手の心情を隠そうとしたりすることができる形式だからであった。しかしながら一人称の告白体は、この自心像のように、自らは、心情を率直に述べているつもりでありながら、実はそれが思い込みにすぎず、自分の心さえ理解できていないということを、読者に知らせることが可能な形式でもあった。本話の自心の告白には、そういう一人称の告白の機能を見取ることができ

【注】

- (1) 谷脇理史「『万の文反古』における書簡体の意味」(『西鶴研究序説』、新典社、一九八一所収)及び「三『萬の文反古』の論」(『西鶴 研究と批評』、若草書房、一九九五所収) 参照。
- (2) 暉峻康隆「萬の文反古」(『西鶴 評論と研究(下)』、中央公論社、一九五〇所収)。なお、この解釈は、神保五彌に受け継がれている(神保五彌校注「万の文反古」『新編日本古典文学全集 井原西鶴③』(小学館、二〇〇三))。
- (3) 谷脇理史校注「万の文反古」『新日本古典文学大系 七七』(岩波書店、一九八九) 参照。
- (4) 前掲註1の「『万の文反古』における書簡体の意味」。
- (5) 『三國物語』二之卷第三「天竺の戒賢論師、因果にて煩事」が類話である。前世の悪行から重病に苦しんでいる主人公が、自害しようとする、夢に聖人が登場して「自害する事おろかなり」、「苦はのがれがたし」と警告しながら、自殺を阻止する。
- (6) 貞享三年(一六八七)刊本(東京大学総合図書館蔵本)による。
- (7) 石田瑞麿『浄土教の展開』第四章「末法と浄土教」(春秋社、一九七六)、渡辺貞磨・石橋義秀「欣求浄土―仏教説話を軸にして」(浜千代清・渡辺貞磨編『日本文学と仏教思想』、
- 世界思想社、一九八四所収) 参照。日本での異相往生の方法として、入水往生、焼身(身燈) 往生、木の梢・岸等の高所から見を投げる投身往生、断食往生、頸くくり往生、切腹往生、土中人定等がある。
- (8) 『発心集』(慶安四年(一六五一)刊)第三之八「蓮花城、入水の事」、宇治拾遺物語(万治二年(一六五九)刊)卷第十一之九「空入水したる僧の事」、沙石集(貞享三年(一六八七)刊)卷第四之七「入水之上人事」等参照。
- (9) 中嶋隆「好色一代女」『岩波講座 日本文学と仏教 第四卷 無常』(岩波書店、一九九四)。
- (10) 渡辺守邦・渡辺憲司編『新日本古典文学大系七四 仮名草子集』(岩波書店、一九九二)による。
- (11) 『祇園物語』には、『清水物語』の「二世安楽」を説く僧への批判を受けて「無行無証を以て、名ばかりの僧なり」と非難し、一貫して「いかほど、大なる事にても、真の心は、なくば、所願を成就すべからず」と記している。
- (12) 『身の鏡』下「神仏信仰」には「今時の人の仏神を信ずるを見るに、正心は毛頭もなく内悪をかまへ仏神を拜む。是愚かなる事どもなり」、「心は邪にして仏神を拜むを、本を置て末に心を懸くるといふ。当世の人、大方かくの如し」と、邪な心のままで拜むことを厳しく批判している。

(13) 朝倉治彦編『仮名草子集成第二巻』(東京堂出版、一九八一)
より引用。

(14) 自心が生きながら烏に目をえぐり取られる場面は、例えば『往生要集』の地獄のイメージから着想された可能性もある。
因みに「烏」は、「八代地獄」の三箇所(衆合に二回、八代地獄の「近辺」に目をえぐる烏が一回)に登場し、『絵入往生要集』(寛文十一年刊)の「衆合地獄」の挿絵には、「代筆は浮世の闇」と同様、烏が罪人の目をえぐっている場面が見える。

『往生要集』で地獄の罪人は、斬られたり、焼かれたりしても、また再生して、繰り返し責苦を受け続ける。その姿は自殺を図っても、死に切れない自心と重なる所がある。

(15) 朝倉治彦編『仮名草子集成第四巻』(東京堂出版、一九八三)

より引用。

(16) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵大惣本稀書集成 第八巻』(臨川書店、一九九五)より引用。

(17) 前掲註2に同じ。

(付記) 本稿は、平成二十八年年度日本文学協会・第三十六回研究発表大会(於岩手県立大学、六月二十六日)における口頭発表を元にしたものである。席上、御意見を賜りました諸氏に深く御礼申し上げる。なお、西鶴作品の本文は『定本西鶴全集』(中央公論社)によったが、引用に際し、漢字は通行の字体に、句読点や仮名の清濁もそれぞれ改めた箇所がある。振仮名も一部省いた。